

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	末期がん患者が希望する療養の場は絶えず変化する中で、どこでも安心して過ごしてもらうために ～緩和ケアにおいて病院医師が在宅医療を行うメリット～
演者名	廣橋 猛
所属	永寿総合病院緩和ケア科・地域医療連携室 医療法人社団博賢会野中医院 医療法人社団悠翔会在宅クリニック

目的

当院は東京都台東区に位置し、緩和ケア病棟を有する地域中核病院である。将来的に緩和ケア病棟への入院を考慮して、がん診療連携拠点病院等から当院緩和ケア外来を紹介受診される末期がん患者は後を絶たない。末期がん患者が希望する療養の場は、状況に応じて変化していくため、希望に応じて外来～在宅～入院にて切れ目ない緩和ケアを行うことが重要である。

実践内容

当院では緩和ケア科医師 2 名が常勤医として病棟・外来業務の傍ら、同じ区内で連携している在宅療養支援診療所から週 2 コマの訪問診療を行っている。在宅医療を受ける患者は、必要となれば必ず当院緩和ケア科に入院できる。年 100 名を超える方が、在宅医療経由で緩和ケア病棟にて最期を迎えるという経過を辿られた一方で、結果的に自宅で最期を迎えることを選ばれた方も少なからずおり、年 30 名ほどの在宅看取りを行っている。

実践効果・考察

病院の緩和ケア医が、在宅医療を行う方式には多くのメリットがある。患者にとっては、療養の場を自分の希望のままに選択することができ、その一方で治療の継続性が担保され、病院の外来や病棟に関わった医師が自宅にも往診してくれる安心感は計り知れない(在宅医療のバリアの 1 つに、新しい医療者との関係構築に関わる不安が存在する)。退院の決断を後押しする事例も数多く、在宅医療に関わる患者数を増やすことができた。

一方で医療者にとってもメリットは多くある。患者宅で地域の医療者と顔の見える連携が深まり、訪問看護師・訪問薬剤師・ケアマネージャーなどと親密な関係になることできる。その関係性は、患者への迅速で質の高いケアにも寄与している。他の診療所医師にとっても、病院の緩和ケア医を身近な存在として相談して頂ける関係性を築くことができた。また、病院の他診療科医師にとっても、在宅医療に精通した医師が院内にすることで、がんの有無問わず在宅医療導入の相談で役に立つことができた。